

報告5 スtockホルム・ニーネスハムン

エースモー青少年住宅

ストックホルムから南へ高速道を飛ばして約1時間。人口2万7千人の小さな港町・ニーネスハムンに着く。

4つのグループホームに、トータルで19人の0歳から21歳までの重い知的障害や自閉症の子どもたちが暮らしていると聞いてエースモー青少年住宅を訪ねた。

昨年、ストックホルムのハビリテーリングセンターで聞いた、学齢期の障害の重い子どもたちの暮らしの場に、デンマークのユトランド半島の小さな町・シルケボーで出会った。

病院の医療的ケアを脱した重い障害のある子どもは自治体の責任で、親元を離れて暮らし、学校（特別学校があれば統合教育している学校）へ通う。卒業後は「新しい家族」ともいえる手厚いサポートのある「グループホーム」で暮らすと聞いた。

それは、スウェーデンではどうだろうか？ そんな思いで、このニーネスハムンにやって来た。

案内してくれたのは、イケメン33歳のミカエル（4つのグループホームの総責任者）。

重い知的障害など何らかの事情で家族で育てることができないとされた（親と話し合っただけで自治体が決定）子どもたちがストックホルム市や近隣の5つの自治体からここにやって来る。

財源は生まれたところの自治体がどの町に移っても、住んだ町に支払う。それは「グループホーム」の財源だけでなく、その町で学校に通えば、その費用もその町に支払うシステムだ。

LSS法に基づく「ショートステイ」ではあるが、週末は家に帰る子どももいれば、多くの子どもたちは長期に暮らしているそうだ。4人がくらす「ディケボー」には10人のスタッフがいる。

別の5人の重い自閉症児が暮らす家に行くと、スリッパをかじりつづけている少女がいた。



この子どもたちが通っている特別学校のこと、三瓶恵子『人を見捨てない国、スウェーデン』岩波ジュニア新書（2013年）P138～P141に、知人のサリネン・れい子さんの勤務する特殊学校としてつぎのように紹介されている。

「ストックホルム郊外ニーネスハムン市にあるこの学校には、近くにある重度障がい児が住む施設に在る子どものほか、自宅で暮らす子どもも通ってきます。重度障がい児居住施設にはニーネスハムン市ばかりでなく遠くの市に家族がいる障がい児も入居しています」。



「脱施設化」により「施設ではない」家」でのくらし」が追求されている。でも、「施設という名称はなくなった」が、生まれた自治体が予算含め障害児の必要な支援に責任を持つことにまったく変わりはない。そこが日本の「施設解体」のための、後はそれぞれ「自己責任」といった様相の動きとは決定的に違うことを考えた。

この青少年住宅はスウェーデンのアテンド社が自治体から委託を受けて運営している。2015年にグスタフスベリイで訪問した高齢者住宅もアテンド社の運営だった。イケメン・ミカエル曰く「スカンジナビアで一番古く、最大の会社。クオリティは飛び抜けている」。アテンド社の実態などは、またつぎの機会に。
(蘭部英夫)